

全店で地域連携薬局の認定取得へ メディカルファイブ、1人薬剤師の店舗でも

2021/10/18 15:12

薬局を展開するミライシアホールディング（HD、札幌市）の中核子会社・メディカルファイブ（北海道小樽市）は、8店舗全店で地域連携薬局の認定取得を目指す。すでに今秋、2店舗で認定を取得。今冬以降も相次いで認定を得られる見通しだ。同社の店舗の中には1人薬剤師の薬局も複数あり、こうした店舗では認定取得のハードルが高いものの、今後の薬局のあるべき姿として地域連携薬局は必要と判断。1人薬剤師の店舗も含め、全店で認定取得を目指す考えだ。



メディカルファイブの地域連携薬局「クローバー薬局百合が原店」

メディカルファイブは札幌市に5店舗、小樽市に1店舗、道北に2店舗を展開。今年9月には「クローバー薬局百合が原店」（札幌市）、「大通西薬局」（同）が地域連携薬局の認定を得た。25店舗前後を展開するミライシアHDの中で認定を取得したのは、現時点で両店舗だけだ。

メディカルファイブの木崎啓介社長は地域連携薬局に関して、「全店舗で認定を目指している」と指摘。今後の薬局のあるべき姿として「在宅の取り組みや多職種連携の在り方などは、必須でやっていくべきだと思っている」と話す。

認定を取得した2店舗についてはいずれも「それに向けて特別なことをしたわけではない。今までやってきたことがつながった」という。地域連携薬局に求められる医療機関との情報共有「過去1年間で月平均30回以上」の実績も、在宅の取り組みが進んでいることから問題なくクリアした。在宅主力の「クローバー薬局百合が原店」は、居宅療養管理指導費の算定回数が月300回ほどあり、売上高の9割を在宅が占めている。「大通西薬局」も居宅療養管理指導費の算定回数が月200回弱に上り、売上高の5割は在宅だ。

同社では12月から来年1月にかけて、「クローバー薬局手稲店」（札幌市）と「そよかぜ薬局」（同）でも地域連携薬局の認定取得を見込む。両店舗とも在宅の実績が4割に上っていることもあり、ソフト面のハードルは「ほぼクリアしている」（木崎社長）状況。ハード面は現在、手直ししている最中だ。また「クリニカル調剤薬局」（同）も来年春には認定を取得できるとみている。

●1人薬剤師の店舗、情報共有「月30回」が課題に

一方、残りの小樽・道北計3店舗はいずれも1人薬剤師の店舗。3店舗とも在宅は行っているものの件数が多くなく、情報共有の「月平均30回以上」がネックとなっている。

だが、医療機関との情報共有には、厚生労働省が1月29日付で出した通知で「居宅訪問の報告書を医療機関へ提出した実績」のほか、「入院時の情報共有」「退院時の情報共有」「外来患者の情報共有」も盛り込まれている。木崎社長は「月30回以上は厳しいが、在宅以外にも力を入れて目指していきたい」と認定取得に意欲を見せる。

メディカルファイブは1999年、ミライシアHDは2019年にそれぞれ設立した。